



ススキが秋の訪れを告げる安善寺

# 蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆  
近藤龍弘

〒940-0052  
長岡市神田町1丁目4番地10  
TEL.(0258) 32-2811

◆スタッフ◆

小林国二 小林善秋 高橋潔  
加瀬由紀子 近藤マリ子 近藤善信  
後援・株式会社アサヒ  
印刷・(株)北越時報社

ご家族の皆さままでご覧ください

## 自然は人の気持ち

## 穏やかにしてくる

翠巖龍弘

『誰かさんが、誰かさんが、誰かさんがみつけた、小さい秋、小さい秋、小さい秋みつけた』と童謡に唄われていますが、八月下旬北東北で小さい秋を見つけてまいりました。

娘の嫁ぎ先のご両親を訪ねる旅でしたが、先方のご自宅の前にはもう秋桜の花が咲き、案内して頂いた山々はススキの穂が揺れ、たくさんの赤とんぼがとんでいました。

今年の長岡は例年になく記録的な厳しい残暑が続いておりませんが、そこでも小さい秋がはじまっております。

毎日の様に、人の生命をいとも簡単に奪ってしまうような凶悪な犯罪が跡を絶ちません。一体日本はどうなってしまったのでしょうか。

今回の旅の中に、毎月ご両親が聴きに行っておられ

る、瀬戸内寂聴さんの「青空説法」で有名な古刹「天台寺」をお参りする事が出来ました。いわゆる観光寺院のようなならびやかさはありませんでした。

昔は沢山の杉が植えられていたようですが、境内の整地等で何本かが切り倒され、それぞれの切り株の上には小さなお地藏さまが置かれてあったのがとても印象的でした。そこを通る人達は静かに頭を下げお参りをします。木の切り株が苔むしているだけでなく、今まで育んできた木々の生命を通してすべての生命の大切さを無言の内に教えられているようでした。

その後散策したぶな林は地面は柔らかく湿気があり、倒れた木々の中には朽ち果ててまさに土に返らんとするもの、横たわった木の上から新しい木の生命を

育んでいるもの、自然は限りなく壮大で、移り行く季節を背景にして人の力の及ばない偉大な力を持っている事をまざまざとみせつけられましたと同時に、大自然の営みに対して人間がいかに小さい存在であるかを実感させられました。

山・川・草・海・湖などが、いかに人間を豊かにしてくれているか、自然を征服するのではなく、自然に畏敬の念を抱き「自然と共に生きる」ということが大事ではないでしょうか。

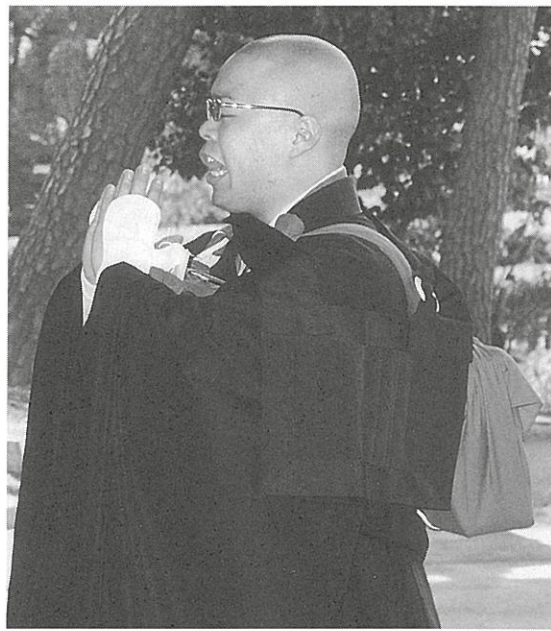
日本をはじめ世界中から自然が少なくなってきたております。自然は人の気持ちを穏やかにしてくれます。犯罪と自然破壊の因果関係があるとしたら、その辺から治していかなければならないのではないのでしょうか。

自然の中にある幸福

# 「大本山總持寺 雲水日記 その二」

## とんでもない所へ来てしまった？

近藤 真弘



数週間前まで学生生活を送っていた僕は、平成十三年三月八日慣れない僧衣を身に纏い、剃髪したての頭で、横浜鶴見の大本山總持寺の門をくぐりました。

『修行生活』これは曹洞宗寺院の跡を継ぐ為には避けて通れない道です。總持寺・永平寺の両大本山、または全国各地にある地方僧

堂の何処かで、安善寺の跡を継ぐためには最低二年半の修行をしなければなりません。そして僕はこの日、父が約三十年前にくぐったと同じ總持寺の山門をくぐりました。

總持寺に着いたらまず最初に「安下処（あんげしよ）」という所に行きます。ここで一晩泊まり、僧衣の身に

着け方、合掌、叉手（しゃしゅ）お拝などの基本的な動作及び修行生活の心構えなどを教えてもらいます。しかし、ここにも簡単には入れてもらえません。まず安下処の前で大声で『上山の為の御指導よろしゅう』と言わなければならぬのですが、これが山奥の寺ならまだしも、都会にある總持寺、会社員や高校生の通る中、大声を出すのは少し抵抗がありました。現

に僕の前に挑戦した人は声が小さく、中に入れてもらえず外にずっと立っていました。それを見ていた僕は恥を捨て大声で言ったので何とか一回で入れてもらえました。

中に入ったらそこには怖そうな先輩の修行僧が何人かいました。この日上山した僕を入れて十人の新到は、

らですが、僕はこの日ですでに、とんでもない所に来てしまったと、逃げ帰りたいう気持ちでいっぱいでした。長い一日が終わり、この日は九時に就寝になりました。明日からの事を考え、なかなか寝れなかったのを覚えています。



翌朝は六時から一日が始まり、自分の持つて来た荷物を点検されて、函ぶらし一本まですべて名前を書き、修行生活に不必要の物を持つてきてないか調べられました。その後、安下処の外で一人ずつ写真を撮り、いよいよ本格的な修行が行われる總持寺の入り口に向いました。



# 『尾瀬、秋色』

加瀬 由紀子

九月になっても残暑がきびしい。エルニーニョ現象か、地球温暖化が確実に進んでいるのか、原因は定かではないが、記録的な暑さが続いている。

だが、暦の行事は正確に移ろい過ぎてゆく。青森に暮らす友人は、「ねぶた祭りが終わればもう秋よ」と言う。かつと目を見開いた勇ましい武将の、原色に彩られた山車とその前後で激しく踊るハネトたち。初めてねぶたを見たとき、アフリカのエネルギーなダンスを連想したものだ。祭りが終わった静けさと、港



の潮風が心なしか寂しいのだと、友は言う。

私が秋を感じるのは、お盆が近い頃の尾瀬の大江湿原である。この時期の尾瀬は派手なニッコキスゲも散り果てて観光客も一段落する。ハンゴンソウの濃い黄色やヤマトリカブト、サワギキョウの紫に沈む湿原は虫の声がにぎやかだが、アキアカネは朱に染まり始め里へ降りる準備を急いでいる。数日前まで鮮やかだった木々の緑も色あせ、早くも赤

く色づき出したナナカマド、ムシカリの実。昼間は三百度を越すことがあっても夜は毛布を二枚必要とする。

環境省の尾瀬パークボランティアとして、シーズン中に五回、週末を尾瀬沼ビジターセンターで過ごすようになった。もう七年が経った。主な仕事は、朝夕の自然観察会の解説と、スライドを選び構成しての夜のスライドレクチャーである。忙しい人間が往復八時間もかけてどうして? とよく

## 秋・飽き・空き……!

小林 国二

編集会議で討議してる時に今までの反省が出てきた。同じパターンでいいのだからか? 能力のない私には出来るだけ同じパタ

ーンを念願するが、優秀な先輩筆者は許さない。辛い文章作りがまた始まる。今回からテーマを設けて執筆せよの仰せで決まったのは「秋」だ。

まず感じたのは残暑で秋は遠い事(会報が出まわるところは涼しいでしょうが)暑さで何もする気になれず原稿用紙を見ては溜息と飽きた無力感、これがアキだ

な! 苦笑。アキで思い出すのは前安藤編集長の存在だ。心の支えがなくなつてここでも空きを感じる。

やはり、秋は空しいのか! しかし、読者あつての我々だからこのアキを讀者から理めていただければ余裕の秋になる。今後とも変わらぬご支援を賜りたい。

聞かれる。日本の自然保護の原点である尾瀬でレンジヤ(環境省の管理官)と共に講義をさせていただけることは大きな喜びである。携帯電話の通じない、車の入れない尾瀬で過ごす一日。沼に映る燧ヶ岳や、刻々と変わる空の色、夕焼けの後に輝きだす銀河の物語。湿原に揺れる草花、鳥や虫。尾瀬が好きでやって来る仲間たちとの団欒。私は癒され、急カーブの長い道のりをまた降りて行く。

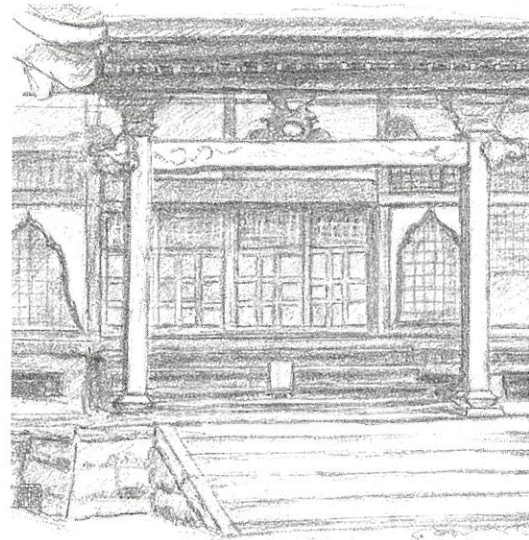
この「季刊紙」を皆さんが手にされる頃、尾瀬は霜が降りて山小屋にコタツが入る。やがて紅葉が燃え初め、短い秋が冬の扉を叩いて尾瀬は長い眠りにつくのだ。



近隣寺院紹介 周囲を山林に囲まれ、お茶がとてもおいしい山寺

甌洞庵 長岡市浦瀬町

甌洞庵住職 伊藤憲章



絵・禅道泰藏

甌洞庵（そうとうあん）は、長岡市街地の東の山腹（東山丘陵）にある山寺です。周囲を山林に囲まれ、清浄な空気につつまれ、森林浴にはもってこいの所です。山の地下水をパイプで庫裡に引き、飲み水に使っていますからお茶がとておいしいです。健康にとても良い環境です。山の中腹にありますから見晴らしがとてもよく、長岡の市街地や八月二日・三日の長岡花火がよく見えます。

寺の歴史をご紹介します。甌洞庵の前は、この辺一帯の城主、高津谷家の菩提寺で、真言宗の本福寺がありました。天正七年（一五七九年）に寺は兵火に焼かれ、無住となり、荒れはてたままの状態でした。その後、一族の甌沢源藏という人が、亡くなった人たちの冥福を祈るため、当

時名僧と言われた乙吉村の龍穩院の五代目住職を礼をたくしてお招きしました。そして、関ヶ原の戦いの年の一六〇〇年に本福寺跡に甌洞庵を建立しました。本福寺の本尊は石地藏でした。寺が焼失した時、雨風にさらされたままの状態

に『読経（どきょう）地藏』として信仰されてきました。現在も甌洞庵本堂に安置してあります。兵火に焼かれた時についたススなのか分かりませんが、黒ずんでいます。約四十センチの高さで、右手に錫杖（しゃくじょう）を、左手に丸いものを持っています。何かの台の上に腰掛けて、左足を下におろし、右足

を組んでいる姿をしています。穏やかな表情は拝む人々の心を和らげます。噂を聞いて時々お参りに来られる人もいらつしやいます。甌洞庵は戊辰戦争の時に焼かれてしまいました。十七世住職の時（明治時代）に大伽藍が建立されましたが、しかし、昭和九年六月の節句の夜、台風のような大風が吹き、ある農家の牛小屋から出火。その火が大風で寺の屋根に燃え移り全焼してしまいました。村の七十数軒が全焼するという大火事で、その火が山を越えて栃尾のある村の竹やぶを焼いたそうです。いかに火勢がすごかったかが分かります。その後、仮本堂のまま昭和の終わりまで過ごし、平成元年に檜の丸柱、松の角柱の立派な本堂に生まれ変わりました。

安善寺行事予定（九月～十二月）

- 【九月】
    - 二日（月） 参禅会（六時～七時）
    - 十日（火） 参禅会（六時～七時）
    - 十一日（水） 坐禅会（十四時半～十五時半）
    - 十七日（火） 参禅会（六時～七時）
    - 十七日（火） 写経会（十三時～十四時半）
    - 十八日（水） 釈尼尊天大祭（十一時半～）
    - 十八日（水） 坐禅会（十四時半～十五時半）
    - 十九日（木） 俳句会（十三時半～十五時半）
    - 二十日（金） 彼岸入り（十一～十二時）
    - 廿三日（月） 参禅会（六時～七時）
    - 廿三日（月） 彼岸中日（十一時～十二時）
    - 廿六日（木） 彼岸明け（十一時～十二時）
  - 【十月】
    - 一日（火） 参禅会（六時～七時）
    - 二日（水） 坐禅会（十四時半～十五時半）
    - 四日（金） 写経会（十三時～十四時半）
    - 八日（火） 参禅会（六時～七時）
    - 十日（木） 十一日（金） 俳句会吟行
    - 十五日（火） 参禅会（六時～七時）
    - 十六日（水） 坐禅会（十四時半～十五時半）
    - 廿二日（火） 参禅会（六時～七時）
    - 廿二日（火） 写経会（十三時～十四時半）
    - 廿四日（木） 俳句会（十三時半～十五時半）
    - 廿五日（金） 廻り開山忌（十時半～）
  - 【十一月】
    - 五日（火） 参禅会（六時～七時）
    - 六日（水） 坐禅会（十四時半～十五時半）
    - 八日（金） 写経会（十三時～十四時半）
    - 十二日（火） 参禅会（六時～七時）
    - 十三日（水） 坐禅会（十四時半～十五時半）
    - 十四日（木） 俳句会（十三時半～十五時半）
    - 十九日（火） 参禅会（六時～七時）
    - 廿二日（金） 写経会（十三時～十四時半）
  - 【十二月】
    - 二日（月） 参禅会（六時～七時）
    - 三日（火） 撰心（坐禅）（十八時～廿時）
    - 四日（水） 坐禅会（十四時半～十五時半）
    - 四日（水） 撰心（坐禅）（十八時～廿時）
    - 五日（木） 撰心（坐禅）（十八時～廿時）
    - 七日（土） 撰心（坐禅）（十八時～廿時）
    - 八日（日） 成道会（十一時～）
    - 九日（月） 断臂接心（坐禅）（十七時半～十九時）
    - 十一日（水） 坐禅会（十四時半～十五時半）
    - 十三日（金） 写経会（納経）（時間未定）
    - 十八日（水） 俳句会（納会）（十時～）
    - 廿一日（土） 山内大掃除（八時半～）
- 参禅会・写経会・俳句会・撰心は終了後茶話会。  
 ●お気軽に参加ください。  
 ●彼岸会（法要・法話）  
 ●廻り開山忌（法要・説教・お齋）  
 ●成道会（法要・法話・お齋）
- 安善寺の行事ではありませんがピハラのいのちの講座（ピハラ仏教者の会主催）が行われております。  
 日時・毎月第二金曜日（午後二時～四時）  
 場所・喫茶いそしぎ長岡市ずらん通り  
 会費・五百円（コーヒークラスタ付）  
 どなたでも参加自由ですので、是非一度参加してみてください。

# 十月二十五日(金) 廻り開山忌法要

曹洞宗は、お釈迦様に始まりその正しい仏法が一つの器の水を一つの器に移すように、摩訶迦葉尊者、阿難尊者へと受け継がれ、二十八代目の菩提達磨大師が中国へ渡られ、中国禅宗の初祖となられ、大祖慧可大師、鑑智僧大師へと伝わり、五十代の祖師である天童如浄禅師に受け継がれました。中国の如浄禅師から受け継がれ、正伝の仏法を日本へ伝えられ永平寺をお開きになった五十一代の祖師が永平道元禅師です。



その後、狐雲懷奘禅師、徹通義介禅師と受け継がれ、五十四代の祖師となられたのが、總持寺の御開山瑩山紹瑾禅師です。道元禅師様は正しい仏法の種を蒔かれたお方で父親に相当し、高祖様と申します。瑩山禅師様は、道元禅師様の時かれた正しい仏法の種を日本中に広める土台を作られたので母親に相当し、太祖様と申します。

曹洞宗では「一仏兩祖」と申しまして、お釈迦様を中心とその両脇に、道元禅師様・瑩山禅師様を両親のようにならめており、一つの宗派に永平寺・總持寺の二つの大本山があるわけです。廻り開山忌とは、永平寺御開山高祖道元禅師様・總持寺御開山瑩山禅師様の両禅師様のご命日を「両祖忌」と申し上げ、教区内寺院が一同に会して報恩法要を勤

## 『墓参の方へのお願い』

盂蘭盆も終わり、秋風とともに虫の音が聴かれる季節になったと思いましたが、まだまだ暑さがぶり返し厳しい残暑が続いております。安善寺では毎年八月十七日に墓地の後片付けをしておりますが年々、瓶・缶等も少なくなってきたり、皆様のご協力の賜物と感謝申し上げます。



お盆後も、本堂脇の護美籠がすぐに一杯になる位、お参りの方が大勢おいでになります。護美籠には『燃えなごみ』『燃えないごみ』と書いた札がそれぞれ貼ってあるにもかかわらず、依然として燃えるごみの籠に瓶・缶が混じっていたり、その逆もあつとをたちません。また、墓地内の空き地に古い花等を捨てていられる方もあり、一人捨てられると、そこがみるみるごみの山になつてしまふのです。それぞれの籠に捨てて頂きますようお願い申し上げます。先日何処かの石屋さんが仕事に来ておられました時に、本堂の階段のところで一服しておられました。何気なしに話しかけましたら

## お別れ

「ほんと！お参りの多いお寺ですのー」と言われまして。喜ばしいことだと思ひます。お墓のお参りの折には本堂・位牌堂の方にも足をお運びになりお参りください。

平成十四年七月〜九月三日

日山テリ様 七月十六日寂

長岡市土合

岩永 秀様 七月三十日寂

新潟中学校町

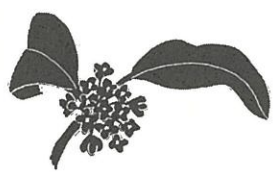
竹垣誠子様 九月二日寂

新潟市女池

小林 レイ様 九月三日寂

長岡市花園東

ご冥福をお祈り申し上げます。



# 読者からの便り

## 佛様を大切に守る

東京都●佐田 明子

昨年の秋、我が家の佛様は長岡に里帰りいたしました。私が嫁いできた頃、お厨子の扉に初代の戒名と元禄十二年の文字がはつきりとしていましたが、五十年近く経って消えかかっておりましたが、方丈様のお世話で、とてもきれいに改装していただきました。



七月のお盆には、初めてご子息様にお経をあけていただいて、佛様はさぞ喜んでいらっしゃると思います。

戦争中に焼け出されたときは、主人の祖母が佛様を風呂敷に包んで逃げたと聞き、より大切に守っていかなければと改めて感じた次第です。

## 写経で充実した毎日にする

長岡市●相沢 チイ

友人のお世話で写経を始めてから十ヶ月になります。何となく手持ちぶさたな時、何となく気持ちが悪く落ちつかない時など、筆をとった

だ無心に書き続けると、いつのまにか書くことに引きつけられて、気持ちが落ちついてきます。写経というものの良さを感じました。

最近が多忙で、写経の回数が少なくなっていますが、それでもただ写すだけではなく、お経の教えを知るように心がけたり、字の形を自分なりに整えたりしながら続けています。

私にとつての写経は、気持ちを醸成することにあります。そして、それによって毎日を充実して暮らすことにあります。

## 昭和二十年の盆参りの一日が忘れられない

長岡市●鈴木タマエ

私にとつてはずいぶん昔のことのように思われます。孫ばあさんと二人で、この安善寺様に、かんかん照りつつける日差しの中、蔵王橋を渡り、砂利道をとぼとぼと歩き、長い道のりを汗だくになり、あまり話すこともなく、おばあさんの後を続いて歩くのがやつとでした。当時は六年生で、年

寄りと子供ですから一時間半はかかったと思います。

昔は、安善寺様までお参りして、お昼をいただくのが唯一の楽しみの方でした。

二十六世の方丈様とおばあさんは非常に仲良しで、困ったことか、法話のお話の質問を聞いたり、ある時は、方丈様をやり込めることもあつたりして「おばあさんにはかなわない」と笑つておられたこともありました。

おばあさんは信心深い人で、お寺参りはどこも欠かさない人でした。八月一日のお寺参りの法話のとき、方丈様は、「今は戦争でなかなか厳しく、ここにお参りの皆様方には（お寺は）空襲できつと焼けると思うから、今日は法話の後、お斎をゆつくりあがつて、本堂の涼しい中で昼寝をしながら、この真中の『ようらく』はめつたにない物だから、焼けると二度と見る事ができないのでよく見ていただくさい」と念を押されました。「私は前の鐘つき堂でお経を一心に唱えてお寺を守り、お寺もろとも死



ぬ覚悟です。皆さんもどうぞ一生懸命生き、もし生きていたらまた皆で喜び合いましよう」とのお話でした。

その言葉を最後に、皆で心配顔で別れて帰りました。まもなくその夜、空襲警報とともにB29が空一面にゴウゴウと勇ましいいうなりの音で長岡一面、私の家の上までバラバラと焼夷弾が振りかぶってきて何もすることができず、家族四人が布団一枚づつ頭にかぶり、土手伝いに下の方に逃げました。

頭の上にバラバラと火が落ちてきて、「ああ危ない」と地面に伏せ、じつと我慢して、ちよつと静になるとまた逃げ、家族を呼び合いながら真つ暗の中を夢中で走りました。子供ながらに生きたく心地がしませんでした。布団から顔を出すと、空一面が火の海で、恐ろしく身体がぶるぶると震えました。これが戦争というものなのか、手も足も出ないと、家の人たちはそう言って残念がっていました。

ようやく朝になり、土手上がって眺めると、くすぶりながら火がポツリポツリと燃え上がり、宮内まで一望できるほど何もなく、土蔵がたまに見えるくらいの焼け野原でした。「ああ、方丈様が言われた通り…」、一瞬にして焼けさり、昨日までとはまるで大違いでした。

後はもう暑いやら、食べ物もなく、着る物もなく、住むところもなく困り果て、どこでもよいか泊めて、食べさせてくださいという人がどれだけ私の家などを訪ねてこられたか分かりません。ごはんを食べさせて、お米を一升、二升と持たせてやりました。

子供ながらに大変な時代だったと忘れることなく、毎年盆参がくると思い出されます。いろんなことを思い浮かべながら、暑さに負けないようお参りに足を運んでいます。

今年参加した旅行で、永平寺様で、思い出の中の安善寺様の「ようらく」の一廻りも二廻りも大きいかと思われる「ようらく」が真

にどっしりと下がって、心からなんとも言えないものがわき上がり、また、めたに見ることができないものと、この眼でしっかりと見て心に残しました。

二十六世方丈様と、龍弘方丈様には心豊かなおつき合いをさせていただき、また、写経を通じて、今までよりお寺に親しみを持つことができ、また足を運んで一身体の続く限り続けていきたいと思えます。

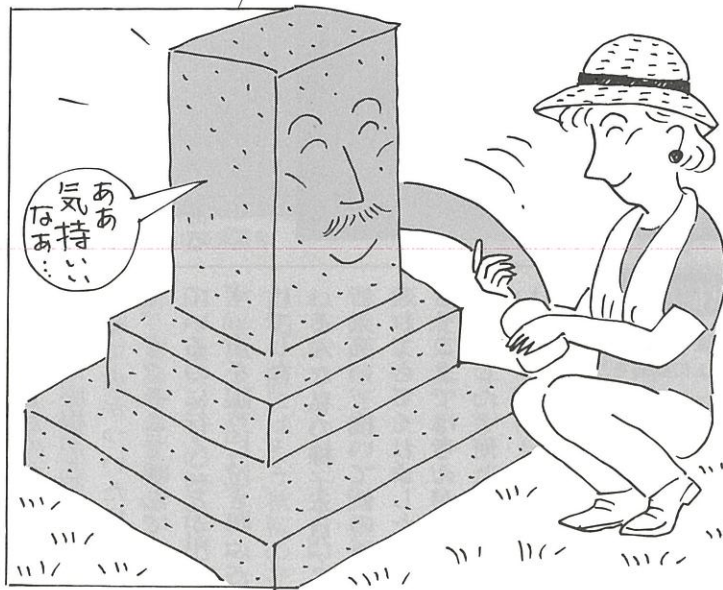
車で近々に行くことができ、幸せに思い嬉しく思っております。

**お盆とお墓**  
新津市●中野 健一

最近の新聞に連日のように、お墓を守る人が少なくなり、誰がお墓を守るのかの問題が取り上げられています。

私はお陰様で、先祖様が立派なお墓を安善寺様の山門入り口に二基立てていただき、三年前に父から墓守を頼まれて以来、毎年二回墓磨きをさせていただいております。

磨くたびに思うのは両親の姿、祖父母の顔、そして聞いたことのある先祖のことなのです。



つてきます。今あるのは両親のお陰と、家内や家族の協力のお陰と、感謝の祈りを捧げています。

墓の上に水をかけると、頭を洗っている感じに、両脇を洗い始めると、両親の背中や胸をタオルで拭いてあげた感触を思い出させてくれます。怖かった父も、優しくなった母も、この石の下で眠っているのかと思うと、なぜかとても愛しくな

に般若心経を読み始めます。私たちがいつかは命絶える時があり、それまで両親のように一生懸命に生きていたいと願うばかりです。

先日義母が生前よく信仰をしていた、菅谷のお不動様に、家内と二人でお参りして来ました。聖水をペットボトルに入れて持ち帰り、仏壇にお供えますと、義母、義父を連れてお不動様に来る度に、義母が昔を思い出して「目が悪かったので、おばあさんに連れられて新発田駅から歩いてお参りに来たもんだよ。お陰で目もそれ以上悪くならなかった」と、いつも言っていた言葉が頭をかすめて行きました。 合掌

**懐かしい加津保のお寺様**  
新潟市●金子 トシ

安善寺様、いつも新聞をありがとうございます。

近隣寺院紹介の加津保のお寺様は、水穴にいた時、前任職様に月経をあげてもらっていました。

イチヨウもバケツを持って行って拾わせてもらった、

懐かしいお寺様で、また、学校の事務員として六年勤めた時、教頭先生が血峰新聞も出されておりました。



**懐かしかった坐禅の記事**  
長岡市●諸橋 和男

このたびも貴紙を送っていただき、ありがとうございます。今号には、坐禅の記事があり、小生懐かしく思いました。

また、編集委員各位のご難儀もさぞかしと思えます。残暑の折、皆様ご自愛くださいませ。

# 何とも情けないことでした



ペコのひとりごと

## 編集 雑感

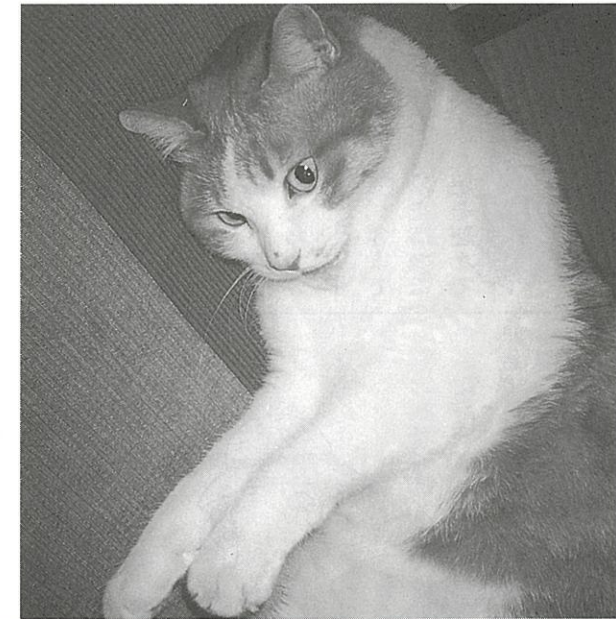
今年も暑い夏魚でしょう。最近では余り見かけなくなった光景ですが七輪の上で塩焼きにして大根おろしで戴く。これが秋の旬ですね。

「旬」という言葉は、季節の最も味のよい時期という意味ですが、最近ではハウス栽培や養殖によって、いろんな物が季節に関係なく食卓に上ります。

自然の摂理からみれば進歩なのか外れているのか。地球上では半分の人が栄養失調に苦しんでいると云われています。食料確保というのと自然との調和。難しい問題です。

どんな内容で編集するかわ委員の頭を悩ますところですが今回は「秋」というテーマで編集してみました。次の新年号では「新年にあたり」といったことをテーマにと思っております。新しい年に向かっての抱負や、こんな時代だからこそ新しい年はこうなつて欲しい、といったことなど、皆様よりの投稿をお願い致します。

おかしいぞ！ 何となく下の様子がおかしいと思つたら、さくらが帰つてきてではありませんか。以前にも増して大きくて、しかもちやんと言う事をきくようになって。私の事はあんまり気にしてない様子です。気にしてると思つているのは私の独り善がりなのかもしれません。時々下に降りて行つて様子を窺つていると「ペコ！ おいで」と呼ばれるのですが、さくらに見つかつては大変と一目散に猫穴から逃げ出すわけです。以前はさくらも猫穴が通れたので追つかげられたのですが、逃げ道さえ確保すればもう安心です。でも、ほんの二週間位で訓練所に戻つてしまいました、居れば気になるけれども居ないともた淋しいものです。



年のお盆は、みんな揃わず、特に一番賑やかな二番目のお兄ちゃんが学生生活最後の夏休みとばかり帰つて来なかつたので、淋しいやら忙しいやら、私の手も借りたかつた様ですが、とにかく暑くて暑くて私の身を守るだけで精一杯、そんな

余裕すらなく少しでも涼しく居心地の良い場所を探すのに懸命でした。ようやく涼しい場所を見つげ出し、朝起きるとそこへ行つて夕方涼しくなるまでじっと体を動かさないので休んでいたのですが、ある日お姉ちゃんが里帰りして

きたらしく私を呼ぶ声が聞こえました。もう嬉しくて一目散にお姉ちゃんの所へ行こうとしたのですが、朝は通れた屋根がこの暑さでまるで火がついた様に熱く、すぐそこで呼んでくれていたのに行くことが出来ず、声を限りに泣き叫ぶだけでした。

そんな私の様子を見て、皆大笑い、抱いて皆の所に連れてきてくれました。私もそこまでは考えが及びませんでした。何とも情けない話です。

## お便り原稿用紙

季刊誌では、増信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。同封のハガキは、ファックスでも、郵便でも送れます。気軽に、お便りをお寄せください。お待ちしております。

### 原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
- 嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

(高橋 潔)

第二十号、秋号は平成十五年一月一日(水)発刊予定です。